私の趣味《1》

ワンコ三昧

小島雅彦（こじま皮膚科クリニック：平塚市）

甘ったれで人使いの荒いバブ（スタンダードプードル、10歳）、控えめ肝っ玉かーさんのブリジット（スタンダードプードル、８歳）、お利口で勤勉なミシェル（ビアデッドコリー、４歳）、彼女ら三姉妹が現在の我が家の犬達である。いずれもメスの中・大型犬である。

30代後半迄犬と無縁だった私が何故犬に魅せられたのか、振り返りたい。

最初の犬との出会いは22年前、サンディ（シーズー、オス）であった。当時シーズーは集合住宅でも飼い易い初心者向きの犬種という理由で飼い始めたのだが、人懐こさという点でやや不満も感じられた。親愛の情をこめて顔を近づけたら、鼻に噛み付かれたこともあった。

２年程して現在の平塚に転居し、大型犬を飼う環境が整った。

犬種図鑑などで慎重に検討し、優しく、大人しく、人懐こく、訓練性能に優れるゴールデンレトリバーのオス、コペルを迎え入れた。

オス犬同士なので当初は先輩のサンディと揉め事もあったが、成長につれ体格差が著しくなると落ち着いた。

コペルは初めて飼う大型犬なので、しっかり訓練し、３年後にトレーニングチャンピオンを受賞した。訓練とは犬ばかりでなく飼い主の訓練の意味合いもあるのだが、私は合格点にはるかに及ばなかったかもしれない。ともかくコペルは理想的な飼い犬に成長した。

そこで私たち夫婦はブリーダー経験をしようと、メスのゴールデンの１頭を迎え入れ、ティアラと名づけ、成長を待って、コペルと交配した。

ゴールデンは多産と言われるが、２ヶ月後に生まれたのは、なんと12頭もの子犬たちであった。

ところが母犬が育児放棄をしてしまった。プロなら犬に任せきりにするのであろうが、私たち夫婦は１頭たりとも死なせまいと、交代で文字通り不眠不休の子育てに追われた。なにせ12頭目の授乳が終わると１頭目がもう空腹になるのだから。これを１日６～８回繰り返すのだ。

戦場のような忙しさの２ヶ月が過ぎ、子犬たちが本当に可愛らしくなってきた途端、もう彼らとの別れの時が来てしまう。色々手を尽くして全員を送り出したが、せっかく苦労して育てたのに一生で一番可愛い盛りに手放さねば子犬が売れない現実を経験し、私たちはブリーダーを止め、これから飼う犬は去勢することに決めた。

穏やかな日々が続くうち、サンディは12歳前に呼吸循環疾患で急死した。

普通の飼い主ならペットロスとなって落ち込むところなのだろうが残りの２頭と触れ合うことで悲しみを紛らわすことができた。

この時多頭飼いの良さを実感し、今日迄続けてい

抱っこの好きなブリジット

る大きな理由である。

犬の寿命は10年以上なので、私たちの一生で三～四世代しか飼えない計算になる。その中でぜひ飼ってみたい犬種がいくつもあれば、必然的に複数を飼うことになる。気に入った犬種であればもう１頭育てて２頭の性格の違いを楽しみたいとも思うのだ。

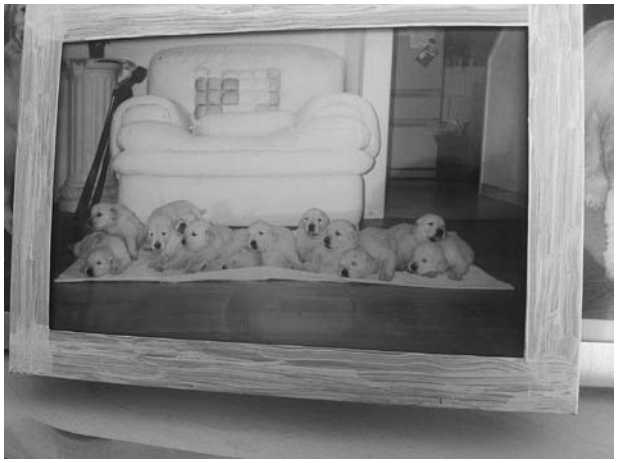
サンディの死後バブがやってきた。スタンダードプードルは、抜け毛が少なく、頭が良い事、また、少し見栄もあるが、街中での注目度が高いことが選択理由である。

コペルは２頭のメス犬に囲まれハーレム状態であったが、奥さんのティアラの前で必死に自制する姿がいじらしかった。

バブとティアラはメス同士お互い大きなトラブルもなく過ごすことができた。

コペルは脾臓の腫瘍で９歳半で急死した。存在感があっただけに喪失感は大きかったが、やはり残りの２頭に癒された。

左よりバブ、ミシェル、ブリジットのお出迎え


12頭の子犬たち

コペルの死後迎え入れたのがブリジット（ブリ）である。同じスタンダードプードルのメスだがどんな子に育つか試してみたかった。ブリは、少し太めで、落ち着きがあり、肝っ玉母さんのようで、良い意味でも悪い意味でも手間がかかるバタバタしたバブと好対照だ。

ティアラはコペルと同じ肉腫により３ヶ月の闘病の末10歳半で亡くなった。この間夫婦で交代で看病し、看取ってやれたので、その死にあたり悔いに思うことはあまり無かった。

悲しみは、やはりバブとブリによって癒された。

それから３ヶ月ほどして、ビアデッドコリーのミシェルがやってきた。医者仲間が飼っていて、非常に可愛らしい表情の犬種であったので飼ってみたかったのだ。

バブはリーダーとの自覚からかかなり新入りの子犬ミシェルを苛めていたが、中間管理職ともいうべきブリが母性本能を発揮、ミシェルを優しくのびのびと教え育ててくれたのである。

犬を育てるのにこんな手が掛からず楽だったのは初めてであった。

現在はこれらの３頭と規則正しい楽しい生活を送っている。朝、ミシェルに起こされ、１日２回の散歩、昼休みの自転車での引き運動が日課である。

多頭飼いのデメリットは何だろう？

何といっても家が汚れる。自分でも時々感じるが、相当犬臭い（犬を飼っている家に往診すると飼い犬に大歓迎される）、車が汚れる、休日がない。犬用トイレの掃除が大変（大小合わせて１日20回位あり、おしっこマットの大が月に600～800枚必要）。

でも帰宅すると３匹揃って精一杯歓迎してくれる表情が何物にも代え難いのだ。

今後も多頭飼いを続けられるか自分の健康と相談しなければならない年齢になってしまった。

いずれにせよ、今の３頭が幸せな一生を送れるよう努めたいと思っている。

私の趣味《2》

トレイルランニングの魅力

長谷哲男（東京医科大学八王子医療センター：東京都八王子市）

先日の東京マラソンの昼過ぎ、銀座から浅草そしてまた銀座へと足を引きずり引きずり走ったり歩いたりしていました。20kmを過ぎてから30km過ぎまではほぼこの状態。楽しかったかと言われれば自信を持って言います。「とっても楽しかった」と。何処へでも飛んでゆきたい気分でした（写真１）。もちろん、20km通過時点で歩いてでも時間内にゴールできるめどがたったのも１つの理由。余裕を持って東京見物です。「待ち受ける観衆？の中ゴールする」嬉しい限りです。でもそれだけではありません。ゴールしたあとの嬉しさ、戸惑いとそのあとの寂寥は一体何なのでしょう。

思えば高校生の頃からハイキングをするようになり、大学生から研修医時代まではハイキングやら登山やらをしていました。５月の雪深い北アルプスを地下足袋にジーパンなどという軽装でよく走り回ったものだと思います（写真２）。冬山の荘厳な美、山小屋での語らい、春山の萌え出ずる新緑、初夏の華麗な高山植物、切れ落ちる岩壁、広大な箱庭的景観、魅了してやまない山の風景です。けれど、山に来るたびに思います。そう、稜線にでるまでの苦しい道のり「俺ってば一体何やってんだ」。それでも40も半ばを過ぎてから、再びハイキングを始めました。山に魅了されたからでもあり、根本的には山の中を歩き回る楽しさに惹かれたからです。山頂にたどり着くとそれなりの充実感はありましたし、広大な風景に癒されます。でもそれだけでは何か足らないのです。

写真１：東京マラソン2013年　息も絶え絶え、足取りも重く

さてトレイルランニングです。約８年前、縁あって八王子で働くようになり、病院からほど近い高尾山から陣馬山までの山並みをよく散策するようになりました。散策していると、ジョギングの格好をして軽快に走り抜ける人たちが眼につくようになりました。最初、若い人は元気だなくらいに思っていました。でも、眼をこらして見ると年配の方が混じっているではないですか。老いも若きも男も女もランニングスタイルで気楽に走っているのです。トレイルランニングとの出会いでした。しばらくは模様眺めでしたが、羨ましくもあり、早速始めました。はまりました！　息は上がりますが走っているとき

写真２：学生時代。某年５月連休蝶が岳にて（背景は穂高岳：12枚羽の地下足袋をはいて春山ハイキング）

も、走り終わったあとも気持ちがいいのです、これが。還暦からのトレランデビューでした。まあ、学生時代も12枚羽（小鉤）の地下足袋を履いて山の中を走り回っていたのでこれはこれで同じことだったかも。

最初のトレイルレースは還暦を過ぎて11ヶ月、翌年７月の北丹沢12時間山岳耐久レースでした。丹沢は学生時代よく散策したところで、北丹沢も様子は解っていました。丹沢は何処に行くにも日帰りでしたので、北丹沢方面でも日帰りハイキングをしました。冬はピッケル片手にワインを飲みながら雪道を楽しんでいました。コースも１～２ヶ所を除くと慣れ親しんだ道。44km、12時間という設定に全く畏怖はありませんでした。それどころか、６～８時間でゴール、と胸算用していました。前夜泊まった相部屋バンガローで同宿者の話では、このレースは日本３大トレイルレースの１つで、しかも一番きついレースであり、フルマラソンの経験もなく、トレイルレースの経験もないものがこのレースで第一関門を越えるのは無理だろうとの話でした。それでもこの段階ではまさか自分が第一関門でタイムオーバーになるとは夢にも思っていませんでした。翌日、学生時代の自分ではないということは、最初の山越えのあと、長い林道の登りで思い知らされました。２回目の山越えのあとの第１関門、約20km地点を制限時間の４時間半で通過することはできませんでした。散々なトレランデビューでした。でも、このままでは年を越せないので、12月に地元の高尾山天狗トレイル18kmに出場し、無事ゴールを駆け抜けることができました（なおこのレースに制限時間はありません）。ここまで書いてきて何が楽しいのか、何が楽しくて走るのか解らないと思います。自分でも解りません。ただ、レースが終わると次のレースを探してしまいます。レース概要を見て、誰かを誘って申し込みます。まさにこれです。この姿勢です。これって何だ？状態。

それでも、最近は身にあったレースをするようにしています。陣馬山トレイルレース（23kmで２回の山越え）とか、東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース（32kmで２回の山越えと10km超の林道の登り）などです。なかでも、丸山和也議員・弁護士もよく参加する陣馬山トレイルレースはお気に入りです。11月の紅

写真３：第11回陣馬山トレイルレース（2011年11月13日）

写真４：第12回陣馬山トレイルレース（2012年11月11日）

葉のなか広い山道を気持ちよく飛んでゆけます（写真３、４）。東京マラソンのときの何処へでも飛んでゆきたい気持ちを具現化してくれます。さあ、今年も４月には東丹沢宮ヶ瀬トレイルレースが待っています。新緑の中、楽しんで走りましょう。

追記：マラソンもいいなと思い始めています。

私の趣味《3》

50歳からの映画と落語

杉田泰之（杉田皮フ科クリニック：横浜市保土ヶ谷区）

突然のメールをいただき、趣味の落語について書くように仰せつかりました。確かにここ数年私は落語を聞きに行くことがあるのですが、まだまだ初心者です。趣味というには大変お粗末ですが、人生の後半（終盤？）に何か楽しいことはないかと彷徨い、50歳を過ぎてふらふらと足を踏み入れた映画と落語について書かせていただきます。

数年前、ネット宅配レンタルのDVDを借り始めました。初めは映画ではなく、田宮二郎主演の旧作TVドラマ『白い巨塔』を懐かしく見たりしました。旧作『白い巨塔』は私が高校３年の時にTV放映されており、医学部志望の私にはとても刺激的で、当時土曜日の夜に通っていた代ゼミの化学の授業を途中で抜け出して帰ったものです。その後あれこれ思いつきで借りるようになり、ハンセン病を題材にした映画『砂の器』で子供をつれて諸国を放浪する患者を演じる俳優は、『白い巨塔』の中では学問一筋で融通の利かない病理学の大河内教授であるのに気づいたりして、古い日本映画も面白いと思うようになりました。

また、今から20年以上も前、私が留学中に米国で『マイアミ・バイス』シリーズがTV放映されていました。当時は英語が分からず画面をながめていただけでしたが、苦労時代に重なるこの懐かしいシリーズを字幕付きレンタルDVDでじっくり楽しむこともできました。そんな時にふと、『ゴッドファーザー』を借り、脳天にガーンとショックを受けたのです。『ゴッドファーザー』は多くの映画監督や著名人が最高の映画と絶賛し、アカデミー賞を受賞した名作です。単なるマフィア映画ではなく、悲哀に満ちた人生そのものが集約された映画です。50歳前後の男性に是非見てほしい映画です。こうしてにわか映画ファンになった私に、医局の先輩で映画ソムリエの高橋泰英先生が、これまでに見た何百もの映画の論評をつづった分厚いファイルをくださったのです。この資料のおかげでどれほど効率よく、すばらしい映画を見ることができたかわかりません。私のお気に入り映画は、『インファナル・アフェア』『フィールド・オブ・ドリームス』『ニュー・シネマ・パラダイス』『スクール・オブ・ロック』などなど数えきれません。そしてもうひとつの趣味「50歳からの落語」も、高橋先生に桜木町のにぎわい座に連れて行っていただいたのが始まりです。私にとってまさしく泰英師匠（市大関係者は高橋姓が多いので、名前で呼ぶのが習わしです）ということになります。

落語を聞かない人向けに解説すると、古典落語という定番の落語も、演じる落語家の個性で微妙に雰囲気が変わってきます。落語のオチは機知に富んだものが多く、ダジャレ風のものもあれば奥深いものもあります。いかにも日本人らしく、でしゃばらず繊細なユーモアの表現法であり、大衆芸能として培われてきたものであることを実感します。私のお気に入りは「猫の皿」「ねずみ」などでしょうか。面白いといっても決して抱腹絶倒するわけではありません。落語家の話術によって、人間のふれあいの中に優雅で高等なユーモアを感じるのです。一方、落語は笑わせるものばかりではなく、人情話と言われ

るものがあります。柳家さん喬という落語家が「柳田格之進」という噺を演じるのを実際に聞き、その後故人の古今亭志ん朝の同じ噺をCDで聞きました。ストーリーは同じながら、一方はせつない幕切れ、一方は悲劇を乗り越えハッピーエンドに近い結末で、最後の最後で終わり方が違うのにどちらも大満足でした。柳家さん喬の実演を聞いたときは、すっかり引き込まれて時間が経つのを忘れました。噺が終わった時、１日の疲れが吹き飛んだというのがおおげさではないくらい、絶妙な話術という職人芸にふれた充足感に満ちた気持ちになりました。落語はどの噺も同じではありません。日本人に生まれたならば、うまい落語を聞かないのは大損です。

松山にて。地方都市は楽しいですね

桂文楽という落語家はどんなに小さな寄席でも完璧な稽古をしてから臨むため、同じ題目の噺をさせると公演時間が１分と違わなかったそうです。この人が晩年の高座で、噺の途中で登場人物の名前を忘れてしまったそうです。しばし絶句した後、「申し訳ありません。勉強し直して参ります。」と頭を下げて高座を降りたそうです。人間ですから忘れることもあるでしょうが、桂文楽はその後病気で没するまで、一切高座に上がらなかったそうです。今では学会発表の演壇に立つこともなくなった私ですが、ふと我々の学会発表は落語に通じるのではないかと思いました。大方の演題はブレークスルーではないのですから、古典落語を演じているのと同じで、いかに目新しく印象的に演じるかを競うのです。話し振りを工夫し、ちょっとした知見、データを提示して聴衆を感心させられるかどうかを競うのです。つまり、その、やはり私は修行が足りなかったのです。真打にはなれませんでした！お後がよろしいようでm(_ _)m